

『西遊記』の笑いをめぐって

駒林麻理子

中国の通俗小説を見ると、内容は多岐に亘る。しかし、「中国小説史において乏しいものの一つはユーモア小説の系列である。……」という考え方が⁽¹⁾ある。詩賦のような中国伝統の形式が、形式や内容の点でユーモアを含みにくいのは理解できる。こういう形式に比較すれば、小説ははるかにユーモアを含み易い条件をそなえている。特に白話を用いて多種に亘る題材をテーマとすることが出来た通俗小説は、他のジャンルの作品よりもユーモアを含み易かった筈である。それにもかかわらず、通俗小説の中にユーモアがあまり発達しなかったのはなぜか。笑話が存在しているのを見れば、ユーモア自体が否定されたのではないことは明白である。通俗小説の作者たちの考え方や、小説の構成の方に、何かユーモアを発達させにくかった理由があるのではないだろうか。これは文学史全体にかかわる問題であるが、私はこの論文で、問題を反対の角度から取り上げてみたい。すなわちユーモア小説とはいえないまでも、多くの笑いの要素を含む小説『西遊記』には、なぜ笑いが登場してくるようになったのだろうか。この問題に対して、『西遊記』より時代はずっとさかのぼるが、例えば『世説新語』のような作品について考えるならば、理由を明快に答えることができる。すなわちこの時代の知識人の生き方には、この作品に出て来るが如きしゃれた発想が流行していたこと、しゃれた発想

のやりとりも流行していたこと、人間を評価することが流行していた為に、収集された資料の中に、個人のしゃれた生き方をうかがわせる逸話が多数含まれており、それが編集されたからである。

もし同様の質問を『西遊記』に対して発したとすると、これほど明快に答えるのは不可能である。『西遊記』は、語り物として徐々に発達して小説の形をとったものであるから、最後の仕上げをした作者の好みや考え方は、大きく作用している筈である。だが、その他にも、作者にそのような考えを起させた理由がないであろうか。私自身は、『西遊記』に関して、笑いが比較的よく小説にとけこんで、無理のない楽しさにまよっていると認めているが、そうなる為には、いくつかの理由が重なっているのではないかと考えている。

二

まず、『西遊記』に笑いが入りこんだ理由、比較的うまく小説にとけこんだ理由として考えられるものをあげてみると、次のようなものをあげることが出来る。

- 1、もともと、笑いに関するイメージを持った人物が存在していて、笑いと物語を結びつけた。
- 2、語り物として『西遊記』が発達して来る中で、聴衆の気持を引きつける上で、笑いが役に立った。同様の理由で風刺も登場し、風刺と結合した形の笑いが出現した。小説としても、読者に対して同じような考えが働いている。
- 3、三蔵の取経という歴史事実に基づいているが、全体としてはフィクションの部分が多く、笑いと結びついても不自然さを感じさせない人物を作り易かった。

- 4、作者の主人公達に対するやさしい目は、『西遊記』全体を通して、笑いを気持のよいものにしてている。これは庶民の願望を反映した結果である。同時に、そのやさしさがユーモアを発達させにくい理由にもなっている。

5、作者の好み。

大きな理由としては、以上の五項目をあげることが出来るが、問題を全部論じきることは無理なので、本論では1・2の項目について検討してみたい。

1の笑いに関するイメージをもった人物としては、まず三蔵をあげることが出来る。

小説『西遊記』では、三蔵は女色以外の外敵に対して主体的に戦う意志がなく、高邁な理想と受動的な弱腰が併存している為に、読者は不自然さに笑いを感じることはあるが、三蔵が積極的に笑いかかっているとは考えていない。しかし、物語が成立して来る過程で、三蔵には次のような異なったイメージが存在していた。

a、三蔵の取経の業績や著書を評価した上で、驚異と畏敬の念で創造された偉大なる人間としてのイメージ。

b、事実に基づいたaのイメージから発展して来た神秘的な人間としてのイメージ。

c、a及びbとは矛盾するが、食い意地の張った俗物としてのイメージ。

bの神秘的な人間のイメージとしては、例えば『太平広記』第九十二卷「異僧」に見られるような物語、三蔵の出生の面から神秘性を示そうとする「江流和尚」⁽²⁾の物語などに見られるものがその例である。

cの食い意地の張った俗物のイメージとしては、『大唐三蔵取経詩話』の「入王母池之処第十一」にその例が見える。三蔵が悟空の前身猴行者に盗みを唆す場面である。

法師曰：「此莫是蟠桃樹。」行者曰：「輕輕小話、不要高聲。此是西王母池。我小年曾此作賊了、至今由怕。」法師曰：「何不去偷一顆。」……猴行者曰：「樹上今有十餘顆、爲地神專在彼處守定、無路可去偷取。」師曰：「你神通廣大、去必無妨。」

法師「これは蟠桃の木ではないのか。」行者「お静かに願います。大声を出さないで下さい。これが西王母の池で

す。若い頃ここで悪さをして、今でもこわいんでして。」法師「どうして盗まないのだ。」……「猴行者「木には今十個以上実がなっています、土地神がそこでちゃんと見張っていますんで、盗みようもないんでして。」法師「そちは神通力が大きいから、平気であろうに。」

この会話は面白問答ではないが、『西遊記』の読者が三蔵に対して抱いているイメージと矛盾するため、疑問を感じざるを得ない。この点に関して、太田辰夫氏は、三蔵の行動を食い意地の面から解釈して、問題を解決した。三蔵という法師は、『西遊記』の三蔵の他にも複数存在し、その中に『西遊記』の三蔵と類似した経歴を持ち、しかも食い意地の張った人物が存在した。三蔵という同名が、人物の混線を引き起こし、『西遊記』の三蔵が食い意地の張った人物になったという解釈である。⁽³⁾この太田氏の解釈によって、三蔵が食い意地の張った人物となった理由と、三蔵の食い意地が笑話になる程のものであったことが判った。

この点について、太田氏の解釈の正しさを更に裏付けする別の資料が存在している。

それは、『警世通言』第七卷「陳可常端陽仙化」である。この小説は、「菩薩蛮」という題名で『京本通俗小説』の中にも載せられている。三蔵に関係あるのは、ある郡王が僧を呼び出して詩作をさせる場面である。僧は、「ちまき」という題に対し次のような詩を詠んだ。

四角尖尖草縛腰 とんがる四よつ角かど草腰に巻まき

浪蕩鍋中走一遭 煮なられ転まがる鍋の中

若還撞見唐三蔵 唐三蔵様に出でくわせば

將來剝得赤條條 皮をむかれて丸まる裸

この詩作の部分が、小説の本筋とは全く無関係なのにもかかわらず、小説に挿入されているのは、笑いをねらった目

的の為である。詩作すべき厳かな時に、相応しくない内容の詩を詠むのは、中国の笑話の形式のひとつである。作者は笑いをねらう為に、小説の流れを中断したのだが、この詩作の部分が笑いとして成立する為には、三蔵の食い意地と、それが笑話になるほど有名なことが、作者と読者の共通の了解として存在している必要がある。双方の間に共通の了解が存在しなければ、この部分が笑いとしてここに挿入されて来る筈はない。

『大唐三蔵取経詩話』の食い意地の張った三蔵は、三蔵に対して存在したイメージのひとつとして登場したのであって、偶然まぎれこんだのではない。

三つの併存するイメージは、差がありすぎるため、一人の人物像を形成していくのは困難であった。この矛盾したイメージは、その後『西遊記』が形成される過程で、徐々に分離して、矛盾は解決されて来た。

偉大なる人間としてのイメージは、庶民の感覚水準による偉大なる人物に変貌したが、基本的には高僧として残された。三蔵は高邁な理想、悪事に対する峻厳な態度において、一応高僧の面影をとどめている。これは、作者のこの作品に対する基本姿勢と思われる。神秘的イメージは三蔵から後退し、食い意地は、別の人物に生かされることになった。上述の三項目のイメージのうち、偉大なる人間のイメージを身に残して、人物像の矛盾を解決されたかの如く見えた三蔵は、後に新たに生じた別の矛盾を人物像の中に宿すことになった。

しかし、三蔵の偉大なる人間としてのイメージが残されたことは、『西遊記』の笑いが無制限に品性を落とすのを防ぐ点では、一定の役割を果たした。

かくて、笑話になるような三蔵のイメージは、別の人物に移動したが、別の人物に笑いが移動するには、それなりの理由があった。

三

次に、笑いが聴衆や読者の気持を引きつける上で役立ったから、笑いが入りこんだ点を論じよう。

笑いが聴衆や読者の気持を引きつけるというのは、二つの意味を持っている。第一は、その場限りの楽しみとして笑いを挿入して、聴衆や読者を笑わせること自体が目的という意味である。第二は、笑いが内容を複雑化する作用を持ち、笑うという楽しさ以外の面からも聴衆や読者の気持を引きつけるという意味である。もし第一の意味だけで『西遊記』の笑いを論じると、問題を全面的に論じたことにならないだろう。聴衆を楽しませるだけの笑いなら、『西遊記』と同じ過程を経て成立してきた『三国演義』と『水滸伝』も、笑いが聴衆の気持を引きつける役割を果たした点では、条件は同じ筈だからである。しかしこの二作品には、笑いはない。『西遊記』にのみ笑いが含まれているのは、笑いが聴衆や読者を楽しませる他に、別の意味を有していると考えられる。

『西遊記』をこの二作品と比較すると、語り物としても、小説としても、庶民の心情に訴える点で差があることが判る。

a、『三国演義』の、国家の興亡の中で、正義感を貫く人間と、『西遊記』の、高邁な理想をかかげた人間とでは、庶民の親近感に隔りがある。下級官吏として正義感ゆえに追いつめられる人間との親近感の差は更に大きい。悪に對抗する人間の怒りや恨みを描く際に、悪の実感が、人間と妖怪では、迫力に著しい差がつく。庶民の願望を代表して、悪に對抗することに対する満足感が弱まる。

b、『三国演義』の如く、権謀術数とかけひき、人間性のぶつかり合いによって起こる迫力が出しにくい。

c、主人公同士を強固に結びつける連帯感が不足している。義理、友情の如く庶民の素朴な心情に訴え得る精神的絆

が欠如している。

d、主人公の集合と離散の如き、時間の推移につれて起こる歓喜と哀感の起伏が弱い。

三蔵の高僧としてのイメージは、庶民を対象とした作品のテーマとしては不利である。他の二作品は、最重要の主人公の人物像が庶民に対して『西遊記』より有利であるにもかかわらず、その主人公の影が薄れ、別種の新しいタイプの暴れ者が登場した⁽⁴⁾。彼らは、自由奔放に振舞うことによって、庶民の感情を満足させ、人気を博した。孫悟空の活躍は、二作品の暴れ者たちより、空間的広がり、武術の多様性、傍若無人さにおいて、徹底している。自由奔放さの徹底で興味を引くという点では、『西遊記』は二作品に勝る。しかし、人間関係を複雑化して内容を深めるといふ点では、重要な要素が欠如している。特に、aの悪に対抗する正義感に対する庶民の支持、cの主人公達の連帯感に対する共鳴を得る要素が弱い。聴衆や読者の立場に立てば、別の何物かを要求したい。

その時、神秘性と笑いは、内容構成の補助作用をするものとして、至近距離にあった。結論から先に述べれば、笑いが神秘性を駆逐したことになるが、神秘性が『西遊記』から後退した理由も検討しておく必要がある。『西遊記』は神魔小説に属すものであるから、本来なら神秘性が発展して、興味の中心となるのが普通だからである。神秘性を有する妖の魅力を描くのが神魔小説だからである。

しかし、三蔵がそなえていた神秘性は、一般の神魔小説の妖の神秘性とはやや異なる。三蔵の神秘性は、被保護者としての受動的な立場のもので、神魔小説の妖の如く、かけひきや攻撃には不向きである。三蔵の立場は、原則上権力闘争の当事者にはなり得ない。弟子達も、阻止する者を排除するか、義侠心で他人を援助するかの闘争をするのであって、権力闘争として攻撃を仕掛けるわけではない。初め漠然とした形の神秘性で三蔵と結びついていたものが、後には仏の加護によるとされ、三蔵が仏の第二弟子として加護を受けるべき理由も明かにされると、神秘性は外部の者に由来

することになり、本人の神秘性は後退せざるを得ない。最高の位置に仏の加護を置くと、悟空達は、神秘性を有するより、その下での力の実行者としてしか活躍出来なくなる。更に『大唐三蔵取経詩話』の猴行者が、秀才として登場し、実務処理型人間として登場していることも、神秘性後退と関係あろう。

神秘性を導入しなかった『西遊記』は、笑いの方に接近した。『西遊記』の笑いは、三つの作用を持つものに分類される。娯楽志向のもの、風刺的色彩の強いもの、人間関係の一端を反映するやや複雑なもの、である。特に、風刺に組み合わされた笑い、人間関係を反映する笑いは、笑い以外のところに重要な意味がある。

娯楽志向のものは、次のような例がある。

那大聖趁着機會、滾下山崖、伏在那裏又變、變一座土地廟兒：大張着口、似個廟門；牙齒變做門扇、舌頭變做菩薩、眼睛變做窓櫺。只有尾巴不好收拾、豎在後面、變做一根旗竿。(第六回)

大聖は機会をのがさず崖を転げ落ちるや、そこに伏せて土地廟に化けました。口をぱっくりと開けるとお廟に早変わり。歯は扉に、舌は菩薩に、目は窓の櫺子に変わりました。ただしっぼだけは処置に困って、後に立てて旗竿に変えました。

ここでは幻想世界の超速の化け合戦が突然中断され、幻想とは異質のきわめて現実的なものへの化け方が具体的に講釈され、不格好な廟が目前に現れる。娯楽志向の笑わせる為の笑いであり、幻想を遠い世界としない為に必要な笑いである。

風刺に組み合わされた笑いは、車遅国での道士との術比べをあげることが出来る。

車遅国国王は、僧を虐待しているが、三蔵達を虐待してはいない。まず被害者としての同情を聴衆や読者に求めるには、理由が弱い。国王の悪政は武力で攻撃されるのではなく、悪徳政治家の道士を重用する無能さが風刺され、道士は

悪徳政治家として風刺されている。悟空が術比べで道士を愚弄したり、揶揄する笑いは、被害者と加害者という立場からの武力抵抗ではなく、笑いを伴う風刺の形に変形した攻撃である。『三国演義』や『水滸伝』に比較して、悪の現実性が薄らぎ、聴衆や読者の憎悪や痛快感が不足する部分を、武力の動的な攻撃から、精神的攻撃に変えて、別の角度から聴衆や読者の感情を高めて、二作品とは異なった満足感を与えている。

車遅国以外の政治家に対しても、基本姿勢は同様である。また妖怪に対する闘争も武力の比較のみでなく、妖の要素のない観察力と知力の面からもなされている。不正に対する戦いが、多角的な攻撃になっている。主人公達と悪徳政治家の間には、幻想の世界故に起こる緊張感の減退があっても、権力闘争の外からやや客観的に相手を観察する視点があつて、その視点から、異なった手段を用いて悪と対決することによって、新しい満足感の領域を開拓している。笑いは風刺と組んで必要な手段となっている。

その他に、『西遊記』の中には、人間関係の心理の一端をのぞかせる笑いを伴う場面が見られる。かかわる人物は、必ず悟空と八戒である。この二人の間には、やや複雑な心理関係が存在する。互いに友情はあるが、反発している。憎しみ合っているのではないが、ささやかな対抗意識があり、相手を出しぬくべく、小さな緊張状態を作る。二人は、自分の性格よりも、相手の性格の欠陥をよく知っていて、如何なる点を如何についたら、相手を自分の思うように行動させ得るのかをよく心得ている。この二人のかけ合いによって起こる笑いは、一方が相手の性格を巧みに利用して、仕事が大層に行くようにするもので、正反対の性格の組み合わせの可笑しさを生かしたものである。

車遅国で道士と術比べをした悟空は、悟空の実力に感動して悟浄に語りかけた八戒を誤解し、仕返しのからいの為に、油鍋から出て来ず、遂に悟空の葬儀になってしまった。

三藏對鍋祝曰：「徒弟孫悟空

『西遊記』の笑いをめぐって

自從受戒拜禪林 護我西來恩愛深

指望同時成大道 何期今日儻歸陰

生前只爲求經意 死後還存念佛心

萬里英魂須等候 幽冥做鬼上雷音

八戒聽見道：「師父、不是這般祝了。——沙和尚、你替我奠獎飯、等我禱。」那呆子捆在地下、氣呼呼的道：「闖

禍的潑猴子、無知的弼馬溫。猴兒了帳、馬溫斷根。」（第四十六回）

三藏は鍋に向かつて祈ります。「わが弟子孫悟空よ

戒を受けて仏門に入りしより

我を守りて西へ来たり、その恩愛や深し

共に大道を成さんと願いしに

思わざりき今日君が黄泉よみに去らんとは

生ける日はひたすら経を求めしも

死せし後も仏を思うらん

遙けき彼方にて待てよ勇なる御霊

あの世にて鬼となり雷音寺に赴け。」

八戒はそれを聞くや「師匠、そんな祈り方は駄目です。——沙和尚、おれの代りに供物を供えて、おれが祈るのを

待ってろよ。」阿呆は縛られて地面に転がされたまま、プンプンして曰く「災づくりなやくざ猴、無知な奴だよ弼

馬溫。死んであたりき悪猴め、油で煮られた弼馬溫。猴の野郎はくたばった、弼馬溫めはお陀仏だい。」

悟空は、怒りもあらわに跳び出した。この相手の性格を巧みに利用して相手を操作する二人の特殊な関係では、悟空は自信過剰や自尊心の強さ、八戒は食い意地や欲ばりを相手に利用されている。

この特殊な関係は、何に由来するのであろうか。私は、二人の組み合わせが、参軍戯の影響を受けているのではないかと考えている。⁽⁵⁾参軍戯は唐代に発達した演劇形式の一種で、参軍という役人と、蒼鶻という召使による滑稽や風刺を目的としたものである。悟空と八戒の間に存在している微妙な関係は、三蔵や悟浄を見物者として意識して行動されることが多い。私は、笑いが導入されてくるに当たり、悟空と八戒の方にも、笑いを引きよせる理由があったのではないかと考え、猿と豚に参軍という呼び名のあることが、⁽⁶⁾二人の関係が笑いと結びついた動機になっているのではないかと考えている。

悟空と八戒の特殊な組み合わせは、笑う目的以外にも、『西遊記』の主人公達の精神的関係を象徴しているかの如く見える。『西遊記』には、主人公達の連帯感となる強固な精神的絆が欠如しているのは、既述の通りである。自分の犯した罪をあがなう為に、仏門に帰依し、三蔵の弟子となって取経を完成させることが、精神的絆に代わる動機づけとなっている。しかし、現実には、信仰の深さが極めて強いとも思えず、義理や友愛も曖昧である。

三蔵と悟空の関係を例にとると、尊敬と信頼、師弟愛は存在しているが、相互の反発も存在している。特に無差別の慈愛をめぐる二人の立場は完全に異なる。三蔵は尊敬されつつも、人格の力によって悟空を制御することが不可能で、緊箍呪の力を借りざるを得ない。八戒に至っては、事ごとに「解散しよう」と提案し続けて、目的地に到達する有様である。なぜ反発がありながら、共同の目的に向かって行ったのか。悟空には自分の自信から来る弱者に対する保護意識があり、八戒には食い意地を満足させるささやかな楽しみがある。主人公同士の間には、義理や友情の理想的な関係があるのではなく、尊敬愛情が一部、反発一部、相手が存在しないと調子ののらない気持が一部、自己を満足させる動機

が一部に、信仰心による結びつきという、表現は単純だが、複雑な心理による絆が存在している。この絆が理想的絆の代わりの役割を果たし、作品を複雑にして興味を引き起こさせる。悟空と八戒の組み合わせによる笑いは、このような精神的絆のひとつを構成するのに必要であった。

自信過剰も食い意地も、風刺されているが、この二人の性格は、取経を成功させた大きなエネルギーであり、風刺されつつも愛嬌となり、二人に注がれる作者のやさしい目を感じる。これは庶民の願望の反映であり、笑いをただ笑う意味以外として必要としつつも、楽しさを求めた作者の気持の現われであろう。

反発しながら引かれる人間関係は、義理や友情によって団結し、前世の因縁によって結びつく人間の関係の仕方から、別の人間関係へ踏みこんで行く、小説の変化の一過程ではないであろうか。風刺と組み合わせた笑いの場合と同じように、人間同士の間で一定の距離をとることによって、相手を客観的に眺める視点をもった関係として、悟空と八戒が描き出され、笑いを伴った関係として楽しみつつも、笑う以外の人間の絆を描き出している。この絆は、『三国演義』や『水滸伝』のような人間関係に対して感じる安定感のある満足を与えてくれなくても、異なった面から、満足を与えてくれている。

四

『世説新語』が書かれた時代は、小説と笑話の距離があまりなかった。小説というのは、小さな出来事を記録する意味で、多種多様な些細な出来事が記録されたからである。特定の知識人のしゃれた生き方をとらえた逸話は、例えば『世説新語』となった。知識人のしゃれた発想と一般人の不細工な行動を合わせたのが、『啓顔録』などの笑話である。志怪小説は怪をとらえた。いずれにしても長短に大差はなく、些細なことを記録したという共通点を有する。

しかし、小説が発達して、人生の離合集散や喜怒哀楽を描き始めると、小説と笑話は共通点を失って来る。笑話も、学識を主とした知識人の笑話と、一般人のことを笑う笑話に別れ、それとは別個に、しゃれや不細工以外の面から人間を見つめる世界が急激に、大きな広がりをもって展開して来る。そこが小説の世界である。

ところが、小説と笑話の距離が開いた後、通俗小説が出現すると、小説と笑話は、また別の意味で接近する気配を見せた。作品の中に、物語の本筋とは無関係に、読者の為に笑いの要素を挿入しようとするところがあるからだ。この笑話挿入形式の笑いは、物語の本筋を無視している。前後関係を自然にするという角度からではなく、連続性を断ち切る形で現われる。その瞬間作者は、小説全体よりも、笑話の方に執着している。

そもそも通俗小説にユーモアが発達しにくかった点に関しては、いくつかの理由が考えられる。風刺風諭は笑いを通してするよりも、厳粛にするのが本来のあり方であると考え、知識人一般の倫理感、また笑話が読者の気持を引くことを笑話本来の瞬発的笑いの面にのみ執着して、笑話に対する意識を使い過ぎる作者の思考法、それに登場人物の精神的つながりが、愛情と憎悪の感情に比重がかかりすぎていること、つまり距離をおいて相手を眺められないため、愛憎以外の関係がなりたちにくいこと、運命の数奇なめぐり合わせを物語の中に重視しすぎるため話の筋立てに主体がかかりがちなこと等があげられる。

『西遊記』は、三蔵の持っていた笑いのイメージが、神秘性を制して導入されたのがきっかけで、笑いを含むようになった。娯楽志向の笑いは、聴衆や読者を笑わせて気持を引きつける為に使われた。その笑いは、徹底した空想の世界の人間に結びついたため、さして不自然さとならずに、反対に、妖怪人間である人物達に、感情の動きと、現実性を加えることになった。

風刺と結合した笑いは、敵対者を精神的な面から攻撃する手段として求められ、非現実なものからくる緊張感の弱ま

りを、別の面から補っている。

主人公達の間の相互のつながりは、特に悟空と八戒のかかわり合いに代表され、笑い結びつき、人間関係の絆を作り出している。この人間関係は、愛情のみの関係より複雑であるが、その間に相手をも更に遠くに置いて眺め、利害関係のみのかかわり方やエゴイズム丸出しのかかわり方とせず、やさしい目で主人公達を見つめている作者は、笑いを手段として転化しつつも、娯楽志向の楽しさを捨て切れずにいる。笑いは楽しく気持のよいものとなったが、ユーモア小説の如く、瞬発的笑い以外にも可笑しさを求めていくところまでは到らなかった。

注

- (1) 前野直彬『中国小説史考』「明・清の小説」の「第一章 通俗小説の流れ」秋山書店 昭和50年。
- (2) 沢田瑞穂『仏教と中国文学』「唐三蔵の出生説話」国書刊行会 一九七五年。
- (3) 太田辰夫『《大唐三蔵取経詩話》考』「神戸外大論叢」第十七巻第一、二合併号所収 神戸外大 一九六六年。
なおこのことに関しては、更に詳しい解説がある。中野美代子『孫悟空の誕生 サルの民話と「西遊記」』『孫悟空の周辺』の「三蔵法師」玉川大学出版部 一九八〇年。
- (4) 小川環樹『中国小説史の研究』「第一部 元明小説史の研究」の「第一章 『三國演義』の発展のあと」、第二章『水滸伝』の作者について、及び「附考三 魯智深とその類例」岩波書店 一九六八年。
- (5) 参軍戯については、次のようなものに解説がある。鹽谷温『支那文学概論』第六章 戯曲「弘道館 昭和22年。青木正児『支那近世戯曲史』「第一章 宋以前戯劇発達の概略」弘文堂 昭和13年。『中国戯曲通史』(上)「第一篇 戯曲的起源与形成」張庚・郭漢城他 中国戯劇出版社 一九八〇年。
- (6) 『顧氏文房小説』『古今逸史』合志『広漢魏叢書』『秘書廿一種』『百子全書』雑家類『畿輔叢書』初編子部等所収の『古今注』「鳥獸第四」には、「猿一名参軍」とあり、『四部叢刊』三編子部所収の『古今注』には、「猪一名長喙参軍」とある。